



Title	検診を受けましょう!!
Author(s)	田口, 鐵男
Citation	癌と人. 2008, 35, p. 2-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

検診を受けましょう！！

田 口 鐵 男 *

今や国民の二人に一人ががんに罹患し、三人に一人ががんで死亡する時代に入ろうとしている。政府はがん対策を総合的かつ計画的に推進するために、国、地方公共団体などの責務を明確にし、基本的施策や対策の推進を図るため、がん対策基本法を2006年6月に成立させ、2007年4月1日からスタートしている。

§がんの死亡率は何故下がらないのか？

早期診断法の進歩、特に画像診断法の進歩、そして各種治療法の改善向上によって、がんの治療成績は、過去30年間で5年生存率が平均して30%は向上したといわれている。

昔のようにがんは、なす術もなく死に向かっていく病気ではなく、診断が遅れない限り治すことができるようになった。もしも、治りきらないまでも、各種の治療法を駆使併用することによって5～10年にわたって社会生活を続ける人も少なくない。しかし、最初のがんは治っても、第二、第三のがんあるいは別の病で亡くなったという話も珍しくなくなった。今やがんに罹患し、治療して生存している人が300～500万人はいると推定されている。

がんが治せるようになったというのに、なぜ死亡者が増え続けるのだろうか。その最大の原因は高齢者が急速に増えているためである。高齢者というがんの予備軍が激増しているので亡くなる人は減らないどころか増えているのである。さらに難治性のがんが増えているのも、がんで亡くなる人がそれほど減らない原因である。増加の著しい肺がん、膵がんはともに難治性がんの代表である。

どの段階で病院を訪ねるかによってがん患者の運命は決まるが、最終的には個人の問題である。がんは早く見つければ確実に治せるのに、

手遅れの進行がんになって病院を訪れる人が後を絶たない。

したがって、がん対策の基本的原則は、早期発見・早期治療にあることは21世紀になっても少しも変わらないし、さらなる診断技術の開発とその効果的利用こそが重要である。

米国ではがんの死亡率は1991年より、罹患率は92年より減少を始め、90年より年率にして0.7%の割合で減少しているという。減少率が大きいのは大腸、口腔、咽頭、肺、前立腺の各がんと白血病の順である。一方、がん死亡率は、90年以降は年率0.5%減少し、乳房、大腸、前立腺の各がんで死亡率の減少が著しいといわれている。とくに興味あるのが乳がん、罹患率は減っていないのに、死亡率が減少しており、「がん検診の普及による死亡率減少効果が国全体として目に見える形で現れた」と解釈されている。

ある研究者によれば、禁煙が最大原因と考えられると述べている。米国の男性喫煙率は1965年が51.9%であったが、1995年には27.0%と30年間で半減したとのことである。

日本のがん死亡率が高いのは平均寿命が長いのが最大要因と考えられるが、禁煙率の低さと検診受診率の低さも大きく関係していると思われる。

§如何にして検診率を高めるか

がんは50%は治るが、未だ50%の人は治っていない。治らないのは発見時期が遅かったからである。治る確率が高いのは発見が早いからである。だから早期発見することが一番いいのである。治療の進歩向上はもちろん重要ですし、予防対策も必要であるが未だ完璧なものは

* (財)大阪癌研究会理事長、大阪大学名誉教授

ない。あらゆる疾病は病期が進行してしまうと、手の打ちようがなくなる。もっとも大切なことは治せるうちに病気を発見することである。

早期検診方法に問題も多々あるだろうが、折角、国が行政検診を実施しているがその平均受診率は17%ぐらいとのことですから、欧米と比較して何という低さであろうか。対がん協会ははじめ関係する多くの機関において、あれこれと努力しているのに何年たっても改善しない。

先ず国民一人一人が、がん対策の重要性を認識してもらい自らの健康は自身で管理することを自覚してもらわねばならない。治せないようになって発見診断されても、医療側はあれこれと手をつくしても治せないものは治せず、高額の治療費を使っても家庭内では大きな損失を向えざるをえない。がんは早期に発見し、治療すれば医療費も少なく済み、治癒する確率も高いので幸いなことである。がんは高齢者の病気のように言われるが、40歳ぐらいからはじまって、社会的（職場ならびに家庭）において働きざかりでかつ大黒柱の役割を果す年齢層に罹患率が高く、がんによる損失は大変深刻なものがある。この辺のことをしっかりと国民に啓蒙し積極的に自らの健康は自ら守るべきものであることを徹底すべきである。

これはがんだけではなく、あらゆる疾病とくに感染症や生活習慣病についてはもちろん、健康の増進・保持ということで学校の教育課程で基本的なことを教えこむべきことではないだろうか。

大学まで出て立派な社会人として働いている方々の中には医学的知識というべきか、健康ということにあまりにも無関心、無自覚の方が多すぎる。裁判まで国民が参加する時代だというのに、健康管理、医療（診断・治療）、予防（公衆衛生）に関して、国民一人一人がもっともと関心を持ってもらわねばならない。今や疾病の治療にあたっては、すべて告知にはじまってインフォームドコンセントをとった上で事を進める時代なのであるから、国民も理解納得できる素養が必要ではないだろうか。行政がなんで

もかんでも頭ごなしに面倒をみるのではなく、国民一人一人に検診が何故必要なのかははっきり納得してもらった上で積極的に参加してもらわねばならない。思うに選挙の投票率の低さと同じように健診の受診率の低さ加減をみると、国民一人一人の民主社会における自覚が足りないように思われる。自由をはき違い悪平等がはびこっている衆愚社会になりつつある。こんなことががんの検診ひとつとっても受診率の低さ加減に現れているようだ。健康（栄養・食生活）の増進、維持管理、公衆衛生（飲料水、下水道、ゴミ処理、予防接種など）、性教育、国民病や伝染病（生活習慣病）など社会生活に必要なことを義務教育・高等教育の場で教えこむ必要がある。

がん検診に関しては、国民皆保健制度のもとで、もっと積極的に保健制度の枠に検診を取り入れ、かかりつけ医が地域ごとに国民一人一人に年一度の健康検診をやれるようにすべきではないだろうか。こうすれば毎年ばう大に増大する医療費の抑制につながるものと考えている。国民も保険金を支払い、それに見合うだけの健診をしてもらって、一人一人が健康の増進、疾病の早期発見・早期治療を受け、よりよい社会生活ができるようにすべきではないだろうか。

§おわりに

いまやがんは死にいたる病と恐れる時代ではなくなったのです。一日も早くがんを正しく理解しがんが死なないように、さらにはがんにならないように心がける時代になってきたのである。目下のところ、完全ながんの予防法はありません。がんが死なないためには、がんを早期に発見し、治療することです。日本のがんの診断技術の進歩には目をみはるものがある。いまだ、集団検診の方法が確立していないがんも多いのです。そこで私は国民一人一人が年一回は（誕生日前後）どこでもよいからがんを含めた診検（検診）を受けるようにしてもらいたい。

ましてや、からだに何かささいな異常を認めたときは、もしかするとがんではないかと疑っ

てみるのが肝心です。がんといわれるのがこわくて、診察を受けに行かない人が実に多いのです。何度も申し上げるように早期のがんは100%治る時代で、がんはけっして恐ろしい病気ではなくなったのです。早期のがんは単に治しやすいだけではなく、小さな手術ですむよう

になって、医療費も安くてすむのです。かかりつけの医師にまずは相談し、納得のいくまで説明をもとめ、必要あれば専門病院を紹介してもらうことこそ大切である。納得いかない場合にはセカンドオピニオンを求めて、ほかの医師に相談して下さい。

これからのガン予防

●ガンを遠ざけるライフスタイルを

ガンの一次予防として、一つには、禁煙、節酒、減塩、節予防、そして緑黄色野菜、魚介類などを積極的に摂取するといった、ガンを遠ざけるライフスタイルが普及することが望まれます。

つまり、発ガンを促進する活性酸素^{かつせいさんそ}などのラジカルを減らし、それを抑制するベータ・カロチンや、ビタミンCのような抗酸化剤^{こうさんかざい}の摂取を最大にしようとする、いわば通常兵器による予防です。もう一つは、DNA診断^{でんあ診断}にもとづく遺伝子工学戦略を活用する、新兵器による予防があります。

このうち、ライフスタイル対策は、今すぐにもでも実行でき、しかもわずかな費用できわめて大きな効果が期待できる予防法です。また、ガン抑制遺伝子 P53 の異常をきたす確率は、喫煙総本数が多いほど高くなるということも明らかにされたので、ライフスタイル対策の中軸である「禁煙によるガン予防」の根拠が、新しい遺伝子研究でさらに強化されたといえるでしょう。

したがって、来世紀にかりに新兵器によるガン予防時代が訪れても、ライフスタイル対策の重要性は不変です。新兵器登場をただ待つだけでなく、低費用で十分効果が期待でき、いますぐ実践できる、通常兵器によるガン予防、つまりライフスタイル操作によるガンの一次予防を強力に推進すべきと思われます。

●「ガン予防十二か条」の実行を

ライフスタイルをくふうするのに、国立がんセンターの提唱する、「ガン予防十二か条」も参考になります。要するに、菜食、禁煙（それに減塩、節酒、節脂肪）のような「的を射た」一次予防を強力に実行することによって、わずかな費用で意外なほどの効果をあげることが期待できます。

ガンウイルスの研究やガン遺伝子、抑制遺伝子などの基礎的研究が精力的にすすめられます。それらの研究の成果によって、ガンを根絶する新兵器の開発が期待されますが、それを待つまでもなく、現世代のガンの抑制は、いわゆる「通常兵器」で十分に可能なのです。

小川一誠 監修——「ガンの早期発見と治療の手引き」より引用——
田口鐵男